

論文内容の要旨

報告番号		氏名	石岡 興平
Significance of bacterial culturing of prophylactic drainage fluid in the early postoperative period after liver resection for predicting the development of surgical site infections (和訳) 手術部位感染の予測因子としての肝切除術後早期のドレーン排液培養の有用性			

論文内容の要旨

【背景・目的】肝切除において手術手技と周術期管理の向上により、合併症と周術期死亡率は減少してきているが、胆汁漏や手術部位感染は未だ高率に発生する。肝切除術後早期のドレーン排液培養結果と手術部位感染の発生の因果関係は明らかではない。本研究の目的は、肝切除術後1日目のドレーン排液培養結果が手術部位感染の予測因子になりうるか検討することである。

【方法】2014年1月から2016年12月までに当科で肝切除術を行い、予防的ドレーンを留置した全症例を評価した。全例で術後1日目にドレーン排液を培養検査に提出した。ドレーン排液培養陽性結果と手術部位感染の発生の関係性について評価した。

【結果】全195症例について検討した。ドレーン排液培養陽性群は6例(3.1%)で、*Corynebacterium* species 1例, *Enterococcus* species 1例, *Bacteroides distasonis* 1例, coagulase-negative *Staphylococcus* 1例, *Enterococcus faecium* 1例, *methicillin-resistant Staphylococcus aureus* 1例が検出された。ドレーン排液培養陽性結果における周術期のリスク因子を多変量解析で検討すると、消化管合併切除のみが独立したリスク因子であった(オッズ比:24.4, $P=0.006$)。また、手術部位感染における周術期のリスク因子を多変量解析で検討すると、術後1日目のドレーン排液ビリルビン値が3mg/dL以上(オッズ比:4.72, $P=0.002$)と、ドレーン排液培養陽性結果(オッズ比:26.1, $P=0.006$)が独立したリスク因子であった。胆管空腸吻合あるいは消化管合併切除を行っていない症例で検討すると、ドレーン排液培養陽性と手術部位感染の因果関係は認めなかった。

【結語】肝切除術後1日目のドレーン排液培養陽性は手術部位感染と相関関係を認めたが、消化管に関与した手技を行っていない症例では因果関係は認めなかった。